

ヘブル人への手紙10章1-18節 「取り除かれる罪」

1A より優れたいけにえ 1-18

1B 家畜の流す血 1-4

2B キリストの体 5-10

3B 永遠の聖化 11-18

2A 全き信仰 19-39

1B キリストの血による聖所 19-25

2B ことさらに犯す罪 26-31

3B 苦難における忍耐 32-39

本文

ヘブル書 10章です。ついに、ヘブル書で著者が語りたことの山が訪れます。1章から、著者が丹念に、私たちの信じるイエス・キリストが行われた贖罪の業を、10章 18節にて結論づけ、そこから一気に私たちを、神ご自身に引き寄せるべく強い勧めを行っていきます。使徒たちの書いた書簡のほとんどは、初めに教理、教えが書いており、それから適用、その教えを生活の中でどのように生かすかについて書いています。その適用が 10章 19節から始まります。今日は、その前半部分、18節まで読んでみたいと思います。

1A より優れたいけにえ 1-18

1B 家畜の流す血 1-4

1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。

9章において、著者は血を流すことによって、初めて罪が赦されることについて話しました。22節に、「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」とあります。罪に対する費用は死であり、死をもって罪を償わなければいけません。したがって、神は罪を赦すために、代償となるいけにえの血をもって人の罪を赦すことができます。アダムが罪を犯した時以来、彼とエバのために神が皮の衣を着せてくださり、アベルが羊を全焼のいけにえとしてささげ、ノアも、アブラハムなど族長も捧げました。そして、モーセによってそのいけにえの制度が、牛や羊などの家畜によって確立しました。実は日本人の中にも、「死をもって償いたい」と願うほど罪深さを抱くことがあります。聖なる神の前ではどんな些細に見える罪であっても、それは死という報酬が伴います。それで罪の赦しは血を注ぎ出さなければいけないのです。

しかし、その動物の血を持ってしても、完全な罪の赦しは与えられないというのが 10章における主

旨です。動物が流す血は、実は、「後に来るすばらしいものの影」であります。影であって実体がないので、完全に罪の赦しを行うことができない、ということです。ここで語られる「年ごと」のいけにえは、ヨム・キプール、贖罪の日のことです。そして「神に近づいて来る人々」とありますが、大祭司が民を代表して、神の栄光で輝く至聖所の中に入ります。しかし、その行為、神に近づくことは完全な形では行われてない、ということです。10章において、いかに神に近づく道が備えられているか、ということを中心に当てています。

2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずで、3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。

一切の罪がきよめられることを示している贖罪の日なので、その後に罪の赦しが必要だとして意識することはなくなるはずなのです。ところが、むしろ罪を思い出してしまふ機会となってしまいます。

クリスチャンにも、同じことが言えます。私たちが礼拝に集うときに、自分がその週の半ばに罪を犯して、クリスチャンとしてきちんとした生活ができず、自分が神から遠く離れたような気持ちになって、礼拝に来ます。けれども礼拝によって、神から、何とかして罪のきよめをしていただくことを期待します。罪が赦された気になりますが、また新しい週を迎えると、同じように罪を犯して、神さまから遠く離れていると感じて、それで一生懸命祈ったり、教会活動に関わったりして、神さまを近く感じようと努力します。自分の良心に咎めを感じて、その咎めを何とかしてなだめようとし、罪意識をなくそうとして、いろいろな宗教的な活動をするようになってしまいます。けれども、これは、新約における、神への奉仕ではありません。旧約時代の奉仕です！外側では、神にお仕えしているように見えますが、内側では葛藤が起こっています。イスラエルの民は、こうした罪意識を抱えていました。

4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

聖書には、「贖罪」という言葉、英語では atonement という言葉があります。これは旧約におけるものと、新約におけるものでは意味が異なります。旧約では、「罪をおおう」という意味がありました。ノアに箱舟を造りなさいと神が命じられた時に、「内と外とを木のやにで塗りなさい(6:14)」と言われましたが、その「塗りなさい」がヘブル語でカファル、覆うという意味です。アダムが罪を犯して、エバとともにエデンの園を出て行かなくならなければいけなくなった時のことを思い出してください。主が彼らに、皮の衣を着せてくださいました。彼らは裸でいたことが分かって恥ずかしくなりましたが、神は、その恥をおおってくださいました。神の御前に出ることができるように、罪をおおう働きをするのが、「贖罪」の意味です。

ある人がこう説明してくれました。高級なレストランにおいて、白いテーブルクロスがかけられたとこ

ろで、食事が出てきました。ある人がスープをこぼしてしまいました。すかさず、ウェイトレスの方が白いナプキンをそこに置いて、あたかもまるで何もこぼれていないかのように直してくださいました。すばらしいですね、けれどもその下には汚れがあります。そのテーブルクロスをクリーニングして真っ白にするまでは、汚れは残っているのです。これが「覆う」ということと「取り除く」ことの違いです。

そして、その取り除きの働きをキリストの血が行います。新約においては、贖罪は「一つになる」という意味があります。キリストにあって、神と一つになる、あるいは神と結ばれて、交わりをするという意味があります。単に罪をおおうのではありません。罪をおおうだけならば、外面的な、表面的な交わりを神と持つことはできますが、心からの、良心がきよめられた状態での神との交わりを持つことはできません。罪はおおわれるだけでなく、「取り除かれる」必要があるのです。

2B キリストの体 5-10

5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。7 そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』」

詩篇四十篇からの引用です。旧約の時代には、数々のいけにえやささげ物がありましたが、神はこれをもはや望まれずに、キリストのためにからだを造ってくださる、つまり、キリストが肉体をとって現われることを意味しています。

イスラエルは、律法によって、神に近づこうとしましたが、実際はますます遠く離れるような歴史を辿りました。彼らは、律法によって神の前に正しいものと認められるのではなく、ますます罪深い存在であることが示されることとなりました。律法にしたがって、神に近づくためにいけにえをささげましたが、彼らの心は神から遠く離れており、ただ儀式だけが行なわれるようになってしまったのです。イスラエルが、滅ぼされるという国家危機にあるときに、預言者が彼らに遣わされましたが、その一人であるイザヤが、こう預言しています。「『あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になるう。』と、主は仰せられる。『わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。』(1:10-11)」彼らの行ないは何も変わらない、いやますます悪くなっているのに、このようないけにえをささげても無駄だ、ということです。

預言者ミカはこう言いました。「私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(6:6-8)」公義を行わないで、代替としていけにえ

を捧げていたのです。神の御心、神の命令に従わない不従順から目を背けて、その代わりにいけにえを捧げることによって代替しようとしていました。私たちもいつも、この傾向があります。主からの命令があり、その単純な命令に従わなければいけないのに、他の宗教的活動で補完しようとします。

しかし、神はご自分のひとり子であられるキリストが、肉体をもって生まれるようにしてくださったのです。5節には、「わたしのために、からだを造ってくださいました」と書かれていました。ベツレヘムの飼葉桶にお生まれになったあの幼子は、動物のいけにえに代わる、神のためのいけにえとしてお生まれになったのです。あの肉と血は、引き裂かれて、血を注ぎ出されるために与えられたものです。

そして7節には、「あなたのみこころを行なうために」と書かれています。イスラエルは神の御心を行い損ねましたが、イエスは御心を全うされました。ゲッセマネの園において、主は、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。(マタイ 26:39)」と祈られました。主は、ご自分が、罪のためのいけにえとなることが、父のみこころであり、それを行なわれたのです。

8 すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした。」と言ひ、9 また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行なうために来ました。」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。

イエス様が、罪のためのいけにえとしてささげられた今、旧約におけるいけにえの制度は廃止されました。イスラエルのいけにえに満足されなかったから、キリストご自身がいけにえとなられたのだから、律法に定められたいけにえの制度を守る必要はありません。

10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

「聖なるものとされている」とありますが、元々の意味は、「別たれる」であります。あるところから別けられて、引き離される、という意味です。英語では set apart です。そして、そこから、「聖なるものとされる」というのは、この世から別けられて、神のものとなる、という意味になっています。神さまの所有物となり、神さまだけのものとなっているとき、「聖なるものとされている」と言えます。そこでここでは、「イエス・キリストのからだは、ただ一度ささげられたことにより、聖なるものとされている」とありますから、イエスさまが十字架の上で死なれたことにより、私たちは罪から引き離されて、神のものとなっている、ということになります。

ですから、私たちは既に聖められているのです。「あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、

聖なる者とされ、義と認められたのです。(1コリント 6:11)」そして、この神の成し遂げられた聖めを、思いや行いにおいて日々、自分のものとして体得していくこととなります。神の前では聖なるものとされたのですが、思いも心も、主の前で聖められるよう、私たちは努めているのです。

その違いをある人がこう説明しました。救われる前は泥沼にいました。けれども、キリストが救い出してください、泥沼から出て、地上におられてくださるようになしてくださいました。けれども、自分の体には泥がまだ付いています。それを洗浄していただくのです。泥沼から陸に移して下さったのは、神が私たちが救われる時に行われる聖めの働きで、残った泥を洗い流して下さるのが、今の聖めの働きです。イエス様はペテロに対して、次のように説明されました。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。(ヨハネ 13:10)」全身は聖めていただいたのです。地上での歩みによって汚れてしまう足だけを洗っていただければよいのです。

3B 永遠の聖化 11-18

11 また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

ここでは日ごとの祭司たちの奉仕のことです。聖所に入り、燭台の灯に油を注ぎ、供えのパンを取り換え、食べるなど、日ごとに行っているものです。ここで大事な言葉は「立って礼拝の務めをなし」というところです。罪の贖いをするために、座ることなく、立ち働いていました。その働きは完了することなく、くり返されていました。

しかし、キリストは今、着座しておられます。立ち回っておられないのです。そして、敵を足台とする、すなわち再臨によって悪魔の仕業を打ち滅ぼされるのです。なぜ、立ち回る必要がないかというと、すでに「永遠」のいけにえを捧げられたからです。「永遠」ですから、途中で効力をなくして、再び他のいけにえが必要になるようなことはありません。キリストがあの方に十字架につけられた時に、私たちの罪は、すべて負われたのです。私たちは、キリストに信仰を置いたとき、すべての罪が赦されました。過去に犯した罪だけではありません。現在犯しているかもしれない罪、これから犯すかもしれない罪、過去・現在・未来のすべてが赦されたのです。

14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

私たちが神の前に近づくために必要な聖めは、キリストが十字架につけられたことによって、すべて行なわれました。そして、そのただ一度のささげ物によって、聖なるものとされる人々を神はご自分の家族に加え続けてくださっています。

ある経済評論家のブログ記事を私はよく読みますが、しばしばその人は基督教のことを話題にします。彼は父がクリスチャンで、中学まで毎週教会に通わされていた、と言っています。その彼がこう書いていました。「(教会の中で)わからなかったのは、「イエスは十字架にかかって人類の罪をあがなった」という話です。・・・なんで2000年前に死刑になった人が、私の罪を引き受けてくれたのか。それがどういう因果関係で、はるか遠くの私の運命を決めるのか——まったく論理が繋がらない。」ここに論理があります。永遠のいけにえなのですから、二千年前に起こったことが今、生きている私にも関わっているのです。

15 聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。16「それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、主は言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」またこう言われます。17「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」18 これらのことが赦される場所では、罪のためのささげ物はもはや無用です。

この箇所、エレミヤ書からの引用は 8 章において詳しく学びました。新しい契約の約束です。神の律法が、石の板ではなく私たちの心の中に置かれる、ということです。ですから、外側の行いを正そうとしたところが、かえって罪深くなったのですが、それは心の良心が汚れているからです。その心に律法が置かれる、すなわち御霊によって心の一新が行われたということです。使徒パウロも同じことを話しています。「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。(ローマ 8:3-4)」私たちの内で、律法の要求が全うされました。私たちのうちにおられるキリストが、死をもって私たちの肉の弱さによる不従順への罰を受けてくださったのです。したがって、御霊に従うときに肉の思いではなく、神の御心を行うことができます。

そして、罪が思い出されることのないほどの完全な赦しである、ということです。これが、動物のいけにえと異なります。いけにえを捧げる毎に、罪が思い出されてしまいます。しかし、キリストのいけにえは、罪が全く思い出されないという恵みの中にいるのです。